

「運動」の多様なかたちとその力学

—小樽運河保存運動経験者の動きに注目して—

共生基盤学専攻 共生農業資源経済学 地域連携経済学 峰尾光人

1. はじめに

近年、各地で任意のボランティア団体や市民活動団体、あるいはNPO法人等が活躍し、そうした人びとの動きは今や地域社会において重要な存在となっている。一方その以前においては非制度的な政治参加の手段として住民運動や市民運動などの社会運動が隆盛し、現在それらがボランティアやNPOなど市民活動の前史として語られることがしばしばある。ただ、一方が古く一方が新しいとする段階論的解釈は誤った理解を与え、逆にこれらを全く異質なものと捉えるのもまた的を射た見方ではない。それらは並存しつつ、その中に運動性とも言うべき共通点を見出すことができるからだ。今後ますますそうした動きが活発化・多様化すると考えられる中で、それらを同じ領域で捉えその内実を探ることは、活動形態や活動規模、その手段など表面的な基準のみによる誤った価値判断を避けたり、各行動主体が強調・協働したりするための重要な示唆を与えてくれるのではないかと考えられる。そこで本論文では、ボランティアや市民活動、NPO、その他の動きのうち運動性をもったものを「運動」と呼び、その多様なかたちを把握するとともに、それがどのようにして生まれ、なぜそのようなかたちで営まれるのかという力学を明らかにする。

2. 方法

本論文では、運河埋立てをめぐる住民運動を展開し、その後も様々な動きを見せている小樽運河保存運動経験者15名に聞き取り調査（うち一名はメールでやりとり）を実施し、保存運動も含めそれ以降おこなった様々な活動経験について、時期・内容・きっかけ・動機・行動前後の自身の変化を中心に、必要に応じて以前していた動きをやめた理由や運動経験者の他の動きに参加しなかった理由についても聞いた。このうち運動性が見られるものを類型化しその特徴を考察するとともに、社会運動論の分析視点も用いながらその生起や展開に関わる要因やプロセスを考察した。

3. 結果

「運動」の多様なかたちとして、特定の対象の有無やその主たる手段が直接的か否かによって3つのタイプがあり、さらに、同じ「運動」でも複数のタイプが混在したり人によってタイプが異なったりと複雑な存在であることも明らかにした。またその力学として、個人が新たに「運動」を始める、あるいは既存の「運動」に参加する際の、生起や展開に関わる要因やプロセスをまとめた行動モデルを提示し、タイプ選択に関する要因についても明らかにした。この中では、新たなきっかけ要因の発生によって既存の「運動」がそのかたちを変える可能性にも言及した。

4. おわりに

私たちは普段他者の行動を「見える部分」で判断しているが、本論文で明らかにしたように「運動」には個人の心理的な要素や時間・経済的余裕など様々な要因が「見えない部分」として関わり、目の前の「運動」が立ち現れている。したがって「見えない部分」にまで注目することこそ、地域や社会、あるいは集団において、運動性をもった様々な動きに対する誤った価値判断を避けたり、各行動主体の強調・協働を進めたりする上で重要であると言える。